

神の力による信仰

今朝、わたしたちに与えられているペテロの手紙の冒頭にある神への褒め称え、「わたしたちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように」という賛美への呼びかけは、全体として苦難の中にある人々に対して呼びかけるにはトーンが高すぎるように思われるかもしれません。比較のために例をあげますが、かつて第二次世界大戦で日本が敗北した時、林達夫という思想家が、敗戦に打ちひしがれる川端康成の言葉を紹介したことがあります。それは単純に負けたから悲しい、悔しいということではなく、これからの日本がアメリカのもとで生きていかねばならないこと、明治以降歩んできた日本がアメリカナイズされた日本になっていくこと、その行く先を見て取って川端は「これからのわたしは哀れな日本の山河のこと以外には書こうと思わない」とつぶやくのです。それを紹介し、一方の戦後の、自由だ、民主主義だ、と高ぶる論壇の様子を批判して戦前の真実を見抜けなかった者たちは戦後の真実をも見逃していると述べて、「物言うなら声低く語れ」と書いたのです。それを思い出しました。一方、このペテロの手紙は離散した人々、前回の説教で言いましたように、ディアスポラな状態のパレピデーモスに宛てて書かれたものです。仲間内のユダヤ人からも「ナザレ人イエスを主と告白する者は呪われよ」と石をもって故郷を追われ、その結果、ユダヤ教とは別の新興宗教団体であるとローマ当局からも認定されたことによって、ローマの公認宗教の枠組みからはずれて監視の対象、皇帝を拝まないゆえに迫害の対象となってゆく。そうしたこの地上においてパレピデーモス、傍らに、置かれた、民、と直訳すればなる仮住まいの人々、天に国籍をもつ民とされたがゆえに、地上においては寄

留者となった人々、いわば今日でいうならば国を追われ、難民状態となっているそうしたキリスト者に対して、ハイトーンで、喜びをもって、「わたしたちの主であるイエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように」と賛美に招いているのです。仮住まいの身だから、目立たないように、身を屈めていよう。キジも鳴かずに撃たれまいではないのです。声を潜め、物言うなら声低く語れ、というのでもない。そうではなくこれはもう「ハレルヤ！」と大声で叫んでしまう。この彼らの置かれている状況と、彼らに呼びかけられるテンションの落差に、驚きを与えられます。

この賛美の招きについて幾つか思うことがあります。まず、先週日曜、役員会がありまして、そのなかで今年の4月以降の3ヶ月間を振り返りました。それ以前の2年間、わたしたちの教会は礼拝を二部に分け、この会堂に集まる人数を減らし、新型コロナウイルス感染症対策を取ってきました。礼拝時間短縮のために説教時間を約3分の2にし、飛沫感染を防ぐために讃美歌も一節を歌うのみにとどめました。教会を支える様々な奉仕の業も解き、みなさんの自主性に委ねました。しかし、新型コロナウイルス対策がワクチン接種などで少しずつ進み、状況が落ち着きを見せ始め、全体にウィズコロナへと舵取りがなされたと判断して、この4月からもとのように礼拝を通常の状態に少しずつ戻してきました。何より二年の間、分かれていた主の民が、半田教会の愛する兄弟姉妹がまたひとつになって、神を礼拝する。その喜びが与えられました。みなが声をかけあう姿に、見よ、兄弟が共に座っている、なんという恵み、なんという喜び、という詩篇の賛美が浮かびました。しかし、現在、また新型コロナウイルス感染症が勢いを盛り返し、BA5など変異種も観測され、予断を許さない状況になっています。それで役員会

でどういう対応を取るか、話し合われたのです。そのなかでぎゅうぎゅうに入るのは仕方ない。電車でも、教室でも、職場でも密な状態は生まれている。ようは声を出すこと、歌うことだという話になりました。しかし、わたしたちの教会は、3年前に議論した時も、賛美については1節だけでも歌いたい。主を褒めたえたい、という理由で残してきたのです。それほどに、わたしたちの応答として、声をあげて、父なる神を、子なるキリストを、聖霊なる神を、そして、救われた喜びと感謝を賛美としてささげることが、わたしたちの心に、魂に、必要なことなのです。会衆賛美は大切なプロテスタント教会の伝統でもある。「わたしたちの主であるイエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように」、この手紙を受け取るポントス・ガラテア・カパドキア・アジア・ピディニアの各地に離散して、仮住まいとなった人々は、神をほめたたえずにはいられないだけの恵みを、キリスト・イエスを通して受けた、あなたたちは地上にありながら、まったく新しい存在とされている。新しい希望のもとに生きる人間とされている。その喜びがあまりに大きく、言葉に尽くしがたいために、ほめたたえよ、そう招く以外にない、ペテロはそう考えているのです。そしてそれは本当にその通りなのです。この賛美のあとに、喜びの理由・その根拠が説明されてゆきます。それがこの箇所の表題にもなっている「生き生きとした希望」なのです。

そして、この「希望」がまさにわたしたちの問題です。絶望という言葉はよく聞きます。また判る気がします。しかし希望はどうでしょうか。わたしはここで聖書が約束している希望と、わたしたちが漠然とかなったらいいなと考えている願望としての希望は分けるべきだと考えます。それは志望校というような意味で使われるべきだと思いますし、そもそも希望とは個人の

願望、望みに吸収されるようなものではない。フィクションの中で希望が語られることはあっても、現実生きるわたしたちの間で、希望という言葉は本当に使われなくなったと思います。希望という言葉やその内実が共有されることがなくなって久しい。小学校や中学校の頃に、将来の希望ということを知られて、サッカー選手になりたいとか、エンジニアになりたい、みたいなことは今でもあるように思いますが、それは願望であって、希望ではない。希な望みと書いて希望、そもそも希望とは苦難のなかにあるときに、全体の目標として掲げられるようなところがあって、わたしが何になりたいとか、こういうものでありたいというのは志望や願望に過ぎない。希望は個人ではなく、社会や民族といった全体の運命と関わるものとして存在する。そして、そのような全体を見渡しての希望というものは、社会が成熟して、隙間がなくなり、システムが組み上げられたところでは窒息してしまうのではないか。そして個人の願望のようなかたちに歪められ、縮められていくのではないか。そういうわたしたちに、また1世紀のトルコの小アジア地方の行政区に住む離散した仮住まいの人々に、ペテロは、神が豊かな憐れみによって与えてくださった「生き生きとした希望」を取り次ぐのです。そして、この生き生きとした希望とは、キリストの復活であることをペテロは高らかに歌います。であるならば、いやこれはたしかにわたしたちの手の届くところではありません。サッカー選手や、エンジニア、大金持ちといった人間の努力や幸運といった出来事の延長線上には存在しない。まさに神の恵み、豊かな憐れみとしか表現できない。天に蓄えられている朽ちず、汚れず、しぼまず、虫に喰われることもない宝と表現されるのももったいもです。およそ地上から望み得るものではありません。だから神さまから頂く恵みの賜物であり、また信じさせ

て頂く以外にないものなのです。地上のものはすべて、死が行きつく先であり、朽ちてゆき、咲き誇っても枯れてゆき、勢い盛んでもやがてしぼみ、消え去ってゆく。永遠を地上に留めることはできず、すべてが死に引き渡される。しかし、その死がもたらす人間の終わりを、キリスト・イエスの十字架と復活が滅ぼした。死なない人間はいない。クリスチャンだって死ぬ。当たり前です。しかし、わたしたちは刑罰としての死を死ぬことはもはやありません。みずからの歩みを振り返って後悔し、何者からか下されるであろう罰を恐れて死ぬ必要はない。それは主の十字架が取り除いてくださった。死は穏やかな眠りに、新しい世界への誕生日に変えられた。わたしたちは豊かな憐れみによって、神の恵みそのものであるキリストの復活に与る者とされている。だから、喜びなさい、とペテロは歌うし、この信仰に招き入れられることによって、あなたがたはあらゆる苦難から究極的に守られていると宣言するのです。わたしの側が信じたから信仰を得て救われるのではありません。すべては神さまからの贈り物であり、賜物であり、恵みであるのであってそうでなければ復活を受け止めることはできません。あなたがたは終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています、というペテロのメッセージは何度も噛みしめるべき大切な言葉です。

「神の力によって、信仰によって守られている」状態、わたしの努力や力によるのではないことが本当に有り難い。原文にあたると判るのですが、「信仰によって」という言葉は、「信仰を通して」とも訳せる言葉です。神の力によって、信仰を通して守られている。神が与えてくださる信仰によって、上にあるものを望ませていただき、新しい命へと招かれている。だから、喜ばずにはいられないし、「わたしたちの主イエス・キリストの

父である神が、ほめたたえられますように」と賛美する以外にはないのです。今朝の箇所は、受け止め方によっては、へえ、そうなのと二の句が告げない方もいるかもしれない。当然です、人間の、わたしたちの認識の外にある出来事ですから。だから朽ちないし、しぼまない、変わることがない。神学校にいるとき、ある有名な神学の教授が、今日、わたしたちが聴いているような話を外国の学者の話などもしながら紹介して、わたしたちが煙に巻かれたような顔をしているのを見てでしようが、こういうことを言いました。いまわたしはこういう研究をしていますが、天国に行ったらもうこんなことはしない。天国に行けたら神さまを賛美するだけだ。神さまを褒め称えることがわたしのすべてになる。そう言われました。その先生は、キリスト・イエスを通して、神がどれほど豊かな憐れみをもって、わたしたちに希望を与えられたか、知ることが楽しかった。その朽ちることのない希望は、わたしたちが被る苦難を通して、わたしたちに近づき、わたしたちを信仰を通して、神が与える復活の望みへと実らせてゆく。それが確かだから、わたしたちはただ喜ぶ。賛美する。神を永遠に喜ぶことがわたしたち人間の地上における本当の働きとなる、この喜ばしい消息をペテロの手紙を通して、わたしたちもより深く知らされたいと願っています。

お祈りいたします。